

写

氏名

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。答えは、指定されたもの以外はすべて「国語」の解答用紙に書きなさい。

「故郷ではおやじさん、なにやってんの？」

定食屋のおじさんは、カウンターのなかから彼に聞きました。四八〇円の豚肉のショウガ焼き定食を食べながら、彼はこう答えました。

「なにも、していない」

パプアニューギニアから来た彼は、当時、国費留学生として工学部の大学院に在籍していました。そしてときどき、大学の近くにある小さな定食屋で食事をするうちに、店のおじさんともことばを力わすようになったところのできごとです。

それは、一九八〇年代前半。留学生の父親がなにもやっていないとは、にわかに信じがたいことでした。そしておじさんは続けました。

「なにもしていないって言ったって、①どうやって食ってんの？」
ややストリートすぎる聞き方ではありますが、横にいたわたしもぜひ聞きたい質問だったのです。
すると彼は、こう答えました。

「木の実を採って食べてる」

②「学力のある答えでした。」注一 高度経済成長期の都市部で育ったわたしだけではなく、一九八〇年代の日本人の中にこんな返答ができる人はほとんどいなかったと思います。

「食べている」とは、「食生活を支えている」すなわち「生活の糧」を指しています。わたしたちが暮らしている日本では、都市はもちろん、農村などにおいても、自然の中から食べ物を採集する食生活を主としている人はほとんどいないのではないのでしょうか。自然から食べ物を採取する機会は、せいぜい山菜採りとか、釣りなど。それらは、食べるものを採るためというより、むしろ（１）「レジャー」と位置づけるのが自然です。そのプラスチックとして手に入れた物を食べる。レジャーである「採集」行為は、それ自体が食生活や命を支えるものにはなり得ません。

たとえば、いくら魚釣りが好きだと言っても、「今日一匹も魚が釣れなかったら食べるものがない」などという③切羽つまつた状況の人などいるでしょうか？ 山菜採りやキノコ狩りにしても、「食べたら死ぬかもしれない」という心配はあっても、「採れなかったら一家が飢える」という危機と直面しているのでしょうか？

わたしたちは、おなががすいたら食べ物を買うことができます。自分で採ったり、栽培したりしなくても、他の人が作った食材や料理を買って食べられるのですから、採れなくてもなんとかなります。彼とおじさんの、あの短い会話が忘れられないのは、発展途上の国に対する一種の珍しさや「未開」といったイメージではなく、「木の実を採って食べている」と言ったその背後に、彼らの「実力」を感じたからでした。買うという行為なしにコンスタントに食べ物を「チョウタツ」し自分や家族を生かすことができ、安全な食べ物かどうかを見分ける力もあり、食べ物となる植物が来年もその翌年も、同じように実るような食べ方を知っている……。

ただ素朴で珍しいという以上に、彼の家族の生活は、自分の力で食べ物を手にし、④自然を理解する力があり、命を守る力も持っているという、「生命」の迫力が存在していました。同時にわたしは、自分の中の「未開」と注二 対峙せずにはいられませんでした。

こう考えると、自分の中の「未開のありか」は食べ物だけではなく、ことに気づきます。家の作り方、衣服の作り方、最近では料理の仕方を知らなくても大丈夫。どれも、「ほかの人」がやってくれる

という社会のシステムがあるからです。木の実を自分で採って食べる彼らとの違いは⑤歴然。ひと言で言うところ、便利なのです。

そのシステムが、いかにわたしたちの暮らしを便利にしているのかということなど、当たり前すぎて実感できなくなっているほどのす。水は蛇口をひねれば好きなだけ出てきます。暗くなればスイッチ一つで明るく灯すことができ、寒ければ暖房、暑ければ冷房。暮らしを支えている「便利」は、数え上げたらきりがありません。しかし、多くの人や技術に支えられているとはいえ、自分の手を使わずに、食べ物が目の前に現れたり、家の中が片づいたり、健康を保ったり、毎日清潔な服が着られるわけでは決してありません。食料はスーパーなどで手に入りますが、買い物に出かけて荷物を家まで運ばなければならぬように、⑥生活を整えるのはわたしたち自身です。

家事には時間も手間もかかりますし、しかも、毎日しなければならぬことです。今の暮らしが、人類史上例をみない便利さに囲まれているとはいえず、それは、大昔に比べれば楽になったということであって、⑦毎日の生活実感をいっさい昔の人と比べたりはしません。だからこそ思うのです。「ああ、生活の雑事を全部自動でやってくれる機械があつたら……」と。

「全自動洗濯機」が発売されたのは、一九六五年のことでした。そう聞くと、「えっ、そんなに昔のことかなあ」と思います。わたしの実感では、周りの人たちが全自動洗濯機を使うという話を聞くようになったのは、一九九〇年ごろからと記憶しています。

普及率の数字がその記憶を裏付けてくれます。一九八六年の全自動洗濯機の普及率は、一八％。発売から二〇年たっても二〇％に届いていませんでした。それが五〇％を超えたのは、さらに一〇年後の一九九六年のことで、現在（二〇〇六年）では、八〇％を超えています。

全自動洗濯機を買って、はじめて使ったときは、「世の中にこんなに便利な機械があるのか！」とばかりに感動しました。ただの「自動」ではなく「全自動」ですから。洗濯槽と脱水槽が分かれていたそれまでの二槽式洗濯機とついつい比較してしまいます。二槽式洗濯機では、洗濯槽で洗い、脱水槽に移して脱水し、すすぎのためにふたたび洗濯槽へと、数分ごとに洗濯物を行き来させなければなりません。放っておこうものなら、洗濯物はいつまでも石けん液の中をゆらゆらと漂っているだけです。これでは洗濯になりません。水道の栓の開け閉めも自分で管理しなければなりませんから、洗濯の間うっかり洗濯機のそばをはなれることもできません。

それに比べて、なんと言っても全自動です。洗濯物を放り込んで洗剤を入れ、スイッチをセットすれば、次に洗濯機のそばに来るのは洗いが上がった合図のあと。数十分は、別のことに集中できます。全自動の底力に感心するとともに、洗濯中の時間が有効に使えて、うれしかったものでした。

かつて「自動」は生活における技術の進歩を象徴するキーワードとして、無条件に輝いていました。

自動ドア、自動販売機、自動巻き腕時計、自動変速装置、自動改札機、自動現金支払機……。⑧最近では、わざわざ「自動」と言わずとも、自動式の機械が増えていきます。オフィスビルなどでよく見かけるのは、利用頻度の低いトイレや廊下、エスカレーターなどで、



うことの味気なさが生まれることもあります。

人をサッチすると「自動的」に明かりがついたり、作動したりする装置。自動は、わかりやすい技術の成果としてわたしたちの手間を減らすことに貢献し、これらを受け入れたわたしたちは、ひとりで動く機械にちよつと未来的なイメージと⑨先進的な優越感を感じていました。その「自動」の代表選手として登場した全自動洗濯機は、家事に大いに貢献してくれました。

ところが……、その感動も、ありがたみもつかの間のことだったのです。

⑩「便利」というのは、ほんの少しの動作で用事がすみ、思い通りの結果に変化すること、自分が行った動作に対して得られる結果が非常に大きいことです。ボタンひとつ、かけ声ひとつ、ハンドルとアクセルをソウサするだけで、何百キロも移動できる、お金をやりとりするだけで食べ物が入る、力仕事や細かい手仕事をしなくてよい……。そんなことが「便利」の魅力です。ものが変化していく過程をじつと見たり、変化の度合いをコントロールする必要はなくなりません。過程がどのようなものか知らなくてもすんでしまい、たとえ知ったところで、自分の意志を生かしたり、工夫する余地を見つけるなど、自ら影響を及ぼすことができない場合も多くあります。

「そこまでやってくれるのなら、もつともつと楽をしたい」全自動といっても、スイッチを入れ洗濯が終わればそれで洗濯が完結するわけではありません。洗濯物を干し、乾いた洗濯物を取り込むという手間をめんどろと感ずるようになっていきました。「いつそのこと、たたんでダンスにしまつてくれたら……。だって全自動なんだから……」などと、乾いた洗濯物を見るたびに思うようになりました。いささか極端な望みとは思いつつも、さらなる

自動を歓迎しながらも、一方でわたしたちは頭を使って考えたり、手を使って工夫してものを作り上げることを楽しいと感じる力を持っています。

「便利」を求めるのは自然なことです。わたしは、二槽式洗濯機で洗濯槽と脱水槽の間で洗濯物を往復させたことなど、すっかり忘れていました。最近では、干すところまでやってくれる乾燥機能付きの洗濯機も出てきましたが、この便利さもやがてあたりまえのものになってしまふのでしょうか。

現在のわたしたちが趣味として行っていることの中には、昔のわたしたちが生活のための生業として行っていたことが少なくありません。釣りやキャンプ、カメラなどのアウトドア・レジャー、キノコ狩り、木の実拾い、日曜大工、陶芸や板金なども生活するために必須の作業。その中から環境を整えたり道具を作る技術が生み出されました。縫い物や編み物やパッチワークは、寒さや危険から身を守る衣服を作るのに必要でした。

なんとも勝手なものです。でもこれは、⑩人間が持つ「便利さ」に対する共通の心の動きなのかもしれません。ある家電メーカーの開発者は、新製品のセールスポイントとして取り扱いやメンテナンスが簡単であることを強調すると、ユーザーからは「もつと簡単なものがほしい」という感想が返ってくる話をしていました。どこまでも簡単に、どこまでも便利に。もつと楽に、もつと速く、もつと正確に、もつとたくさん、もつときれいに……。わたしたちがこのような「もつと」を持つているために、便利さはすぐに

「アウトドア・レジャー」ということばがあるのは、世界中でも限られた国だけだそう。アウトドアを「レジャー」として位置づけることができるのは、あまりにも便利さが進んでしまっていることを表しています。そして同時に、生活に手間をかけた自分でも工夫したりするのは楽しいことなのだ教えてくれているようにも思います。

「注3 インフレ」を起こします。便利なものが増えたり便利さに慣れたりすることで、便利さの価値がソウタイ的に下がっていくのです。そして、意外と底の(2)「自動の底力」にちよつと失望し、全自動洗濯機による洗濯は「軽減された家事」ではなく、「ふつうの家事」へとカクサげされました。そしてはじめて手にしたときの目の覚めるような驚きやうれしさは、「全部が自動じゃない全自動洗濯機」への不満、もしくはあきらめへと姿を変えていきました。

もつともつと便利にと「多くの自動化」を求めても、やがてそのありがたみが薄れたり、味気なさを感じることもあります。自動化して楽をしたいというのも生活や未来を作っていくことのひとつですが、自動だけじゃつまらない、と考えるのも、未来のひとつです。また、便利さをお金で買うのもひとつの選択ですが、できるだけ多くの工程を自分の手で行うこともまた、ソウゾウ的で楽しい仕事です。

(中略)

(佐倉統／古田ゆかり『おはようからおやすみまでの科学』(筑摩書房)より)

※ ※ ※

注1 高度経済成長期：一九六〇年代を中心に、日本の経済が急激に成長した時期

いくら洗濯のすべてを機械に任せたいからといっても、洗濯した衣類を着用して汚すところまで、「全自動」にお任せしたいとは思いません。なんだか変なことを言うな、と思われるかもしれません

注2 対峙：向き合って立つこと

ね。自動の機械を求めたとしても、逆にすべてが自動になってしま

注3 インフレ：世の中に流通するお金がふえて、お金の値うちが下がること

問一 本文中のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ①どうやって食つてんの？ とありますが、この質問で、定食屋の「おじさん」は、留学生の「おやじさん」の何を知りたかったのですか。解答らんに合わせて漢字二字で答えなさい。

問三 ②「迫力」のある答えでした。とありますが、なぜこの答えに「迫力」があるのでしょうか。次の中から、最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 「木の実を採って食べてる」という答えが、生命を保つ上での実力を感じさせたから。
- イ 「木の実を採って食べてる」という答えが、野性的な本能をはつきりと感じさせたから。
- ウ 「木の実を採って食べてる」という答えが、都市部にはない目新しさを感じさせたから。
- エ 「木の実を採って食べてる」という答えが、日本人よりはるかにすぐれた生活を感じさせたから。



問四 (1) とありますが、次の中から、ここに入るのに最も適当な語句を選び、記号で答えなさい。

ア 食べるものを探す イ 自然との共存を学ぶ ウ 行為そのものを楽しむ エ おいしいものを食べる

問五 ③ 切羽つまつた ⑤ 歴然 とありますが、ここでの意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

③ 切羽つまつた

ア 危険が身近にせまって苦しくなった イ 追いつめられてどうしようもなくなった

ウ 責任を感じてひどくきん張ってしまった エ 周囲に気をつかつてつかれてしまった

⑤ 歴然

ア 簡単である様子 イ きりがない様子 ウ はっきりしている様子 エ 昔からのものである様子

問六 ④ 自然を理解する力があり、命を守る力も持つている とありますが、「自然を理解する力」や「命を守る力」の内容を具体的に説明している適当な一文を探し、最初の五字をぬき出して答えなさい。

問七 ⑥ 生活を整える とありますが、それはどういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 便利な機械を信用せず、細かいところまで人の目を行き届かせて管理すること

イ 便利な機械を上手に使うことで、人が生きていくのに必要なものを取りそろえようとする

ウ 機械を使わず、自分の手だけを使って毎日家事を行うことで、便利さにおおれられないように反省すること

エ 便利な機械を使うだけでなく、自分の手を使って、自分の生活が快適になるように心を配りきちんとすること

問八 ⑦ 毎日の生活実感をいちいち昔の人と比べたりはしません。 とありますが、それはどういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 毎日感じている便利さを、昔の人が感じていたであろう不便さと比べることは無駄だと思うこと

イ どんなふうに住生活しているかという自分の生活の様子を昔の人の様子と比較して考えたりはしないこと

ウ 現在の機械の機能を、昔のものと比較して不足を指摘したりしないこと

エ 当然のようになっている便利さを、ことさらに昔の生活と比べて感心したりはしないこと

問九 ⑧ 最近では、わざわざ「自動」と言わずとも、 とありますが、それはなぜですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 今では自動でない機械を使いこなせる人が少なくなってきたから。

イ 自動のありがたみもつかの間で、もっと便利な機械を求めるようになったから。

ウ 自動の便利さが当たり前のものになり、さらに進んだものになっているから。

エ 自分の意志を生かしたり、工夫する余地がないと、最新の自動とはいえないから。

問十 ⑨ 先進的な優越感 とありますが、それはどういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 未来の生活を先取りしているような、自分の現在をすぐれたものと考えている気持ち

イ 科学がいちじるしく進歩していく時代に、自分が生きていることを感謝する気持ち

ウ 最先端のものを使用していることで、それをうまく使いこなせない人たちを見下す気持ち

エ 最新の機能を持った機械を使用していることでもたらされる、他の人とは少し違う自分を誇らしく思う気持ち

問十一 ⑩ 人間が持つている「便利さ」に対する共通の心の動き とありますが、「共通の心の動き」の説明として次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 人間は一度便利さを手にするとそれに慣れてしまい、当初の感謝の気持ちを保ちつづけることなく、もっと便利なものを求めるようになること

イ 人間は便利なものに慣れると少しの手間も嫌うようになり、昔から比べると便利になったにもかかわらず、不満をぶつけることが多くなること

ウ 人間は便利なものを持つと優越感を感じるとともに、どんななまけ者になっていき、自分の手を動かすのがつらいと感じるようになること

エ 人間は一見便利そうに見える「自動的」に作動する装置が、利用頻度も低く、自分たちの生活に本当は必要ではないと気付くようになること

問十二 (2) とありますが、次の中から、ここに入るのに最も適当な言葉を選び、記号で答えなさい。

ア 浅かった イ 狭かった ウ 広がった エ 深かった

問十三 ⑪「便利」というのは とありますが、本文中の「※ ※ ※ ※」より後の文章で、「便利」であることの良い点・悪い点はどういうことであると言っていますか。文中の言葉を使って説明しなさい。答えは左の解答らんに直接書きこむこと。

良い点

悪い点

二、次の詩と文章を読んで、後の問いに答えなさい。答えは、指定されたもの以外はすべて国語一四の解答用紙に書きなさい。

著作権上の都合により文章の
掲載はできません

問一 ① たやすく自分の非を認めるといふことは、なかなか樂には生きられない人だといふことです。とありますが、それはなぜですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 簡単に自分が悪かったと認めると、周りの人から責められることが多くなるから。
イ 自分の欠点ばかり見ていると、自分がだめな人間だと思うようになってしまふから。
ウ 欠点を改めて正しい生き方をしたいと思うと、自分を責めることが多くなるから。
エ 周りの人に気をつかい、謝ってばかりいると、自分の考えが分からなくなってくるから。

問二 A 母の瞳 とありますが、どのような瞳ですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア どんなときでも手助けしようと思守る瞳 イ どんどこでも明るく見守る瞳
ウ はなれたところから心配そうに見守る瞳 エ はなれていてもいつくしみ深く見守る瞳

問三 1 にあてはまる季節を漢字一字で答えなさい。

問四 に入れるのに最もふさわしい、具体的な行いを表す言葉を考えて書きなさい。

問五 B れる とありますが、これと同じ意味で使われているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア いたずらを先生にしかられる。 イ 先生のことか思い出される。
ウ 先生はなんでもめしあがれる。 エ 先生が学校から帰られる。

問六 ② 詩人の心は「素朴な琴」です。とありますが、この比喩と同じ種類の比喩が使われている文を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「わたしの耳は貝の殻 海の響きをなつかしむ」 イ 「母は弟に手を焼いている 困ったものだ」
ウ 「桜若葉の間にあるのは むかしなじみのきれいな空だ」 エ 「川は荒れくるい 笛のように歌っている」

問七 ③ 技巧を超えて とありますが、ここでの意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 詩を作る技術を無視して イ 詩を作る技術とは関係なく
ウ 詩を作る技術を総合して エ 詩を作る技術をみがいて

問八 2 にあてはまる言葉を「素朴な琴」の詩の中からぬき出しなさい。

問九 C みでみたい とありますが、何を見ていたのですか。具体的に答えなさい。

問十 D おのおどのように とありますが、この音にふさわしい表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア しんしん イ ざざざあ ウ ぱらぱら エ しとしと

問十一 ④ 天上界からのひそかな便り とありますが、どのような「便り」でしょうか。二篇の「雨」の詩の内容をふまえて、天上界からの「便り」を解答らんに合わせて書きなさい。答えは左の解答らんに直接書きこむこと。

重吉さんへ

わたしが雨を降らせるとき、いつも伝えたいと思っています。

それは、

天上界より